『言語感覚』を豊かに育む

～絵本の読み聞かせの効果・効用と瀬川理論の再考～

山口学芸大学教育学部教育学科特命教授　上　田　　保　明

１　はじめに

「理論なき実践は砂上の楼閣である」「実践なき理論は空虚である」とは全国小学校国語教育研究会（略称：全小国研）創設者の一人であり現在の全小国研の礎を創った瀬川榮志先生の口癖であった。私は、この考えを大切にして小学校の学校現場で教育実践にあたってきた。退職後は、社会教育に７年、教員養成大学に６年目の勤務となっているが、この言葉は頭の片隅から離れず時に唱えることがあるほどである。

絵本の読み聞かせの効果を述べるにあたり、この考えに立ち、自らの実体験を述べることでその効果を深く理解いただければ幸いである。

２　絵本の読み聞かせの効用・効果

（１）　絵本作家 宮西達也氏による絵本の読み聞かせ会に参加して

周南市立美術博物館主催による「宮西達也の世界 ミラクルワールド絵本展」が令和６年6月28日～9月1日にかけて山口県周南市で開催された。宮西氏が来山され月１回、講演会、サイン会、絵本の読み聞かせ、ギャラリートークと多彩な催しが企画された。

筆者は宮西達也氏と 20 数年前から親交があり小学校校長として勤務していた学校では子供たちに度々楽しい講演をいただいていた。しかし、退職後、ここ10年ばかり出会いがなかったため、再会を楽しむために講演会・読み聞かせ会への申し込みをしたものの宮西氏による絵本の読み聞かせ会のチケットのみ入手できた。

7月27日（土）、周南市文化会館で読み聞かせ会は開催された。50人程度のこじんまりした会であったが、皆、宮西氏のファンらしく和やかな雰囲気の中で会は始まった。

「おじさんは誰だか知っているかい？」と語り掛け、読み聞かせの最初で、老若男女（2、3歳の幼児から小生のような73歳の高齢者）の参加者の垣根をなくし、一手に引きつけた軽快なトーク。67歳とは思えない声量、はずみのある語調、そしてテンポのよさでまさに“宮西達也ワールド”の開幕。最大の盛り上がりは宮西氏と来場者による絵本の読み聞かせであった。

氏の著書である『ドロドロ　ドロンキーとうゆうすいくん』（ポプラ社）を宮西氏が地の文を読み、会場から突如として指名された３名が出演。それぞれどろんこのようせい悪役ドロンキー、やさしいようせいたち、ようせいの子 ゆうすいくん、石のようせいストーンくん、葉っぱのようせいリーフちゃん、お花のようせいフラワちゃんといった多くの登場人物を分担して音読する参加型の読み聞かせ会となった。30歳代のお父さん、同じく30歳代のお母さん、そしてこともあろうことか73歳のこの私がライブ指名された。宮西氏の指名とは名誉なことと意を決して舞台の横に立った。宮西氏のちょっかいや揶揄（悪役ドロンキー役の最年長の私には「歌舞伎調だね」とお褒め？のコメント、30代のお父さんにはようせいを複数配役され、「可愛く言って！」「ここはお茶目に」と無茶な注文がつく）

も入って会場は爆笑の渦。宮西氏と突如登壇させられた３人と会場が一体となって盛り上がった読み聞かせ会となった。大学に勤務する私にとっては久々に小学校の教壇に立った気分で高揚感を味わえたひとときであった。

（２）　絵本の読み聞かせは気分を変える

私事続きで述べるならば、当時の私は風邪をこじらせた後遺症で、意気消沈、食欲不振、気力も衰え､久しぶりに会える宮西氏との再会の会場へ出向くのも足の重い状態であった。乗り気のしない、おそらくはた目から見たら生気のない白髪頭の前かがみのおじいさんと見られたに違いない。だが１０数年ぶりの再会を是非してみたいとの強い思いから、意を決して出かけたのであった。

会場で開会を待つと、登場した宮西達也氏の第一声は先にも述べたが、弾むような元気いっぱいの声で、「おじさんは誰だか知ってるかい？有名な絵本作家さんなんだよ」と話しかけ和やかな雰囲気を醸し出し子供から大人まで注目させる。そして、参加者の心をわしづかみにすると、時のたつのも忘れさせる歯切れの良いテンポ、活力ある声量、声の張りでまさに“宮西達也ミラクルワールド”に引き込んだ。

（上田）　（宮西氏）

病み上がりの私でさえ右の宮西氏とのツーショットからも感じていただけるように病を忘れ、明るい気分になった。同行した妻も「久しぶりの笑顔だったね」と漏らすほどの私の変容ぶりであったことは、私も認める。繰り返しこの写真を自分で観ても嬉しくなるツーショットの一枚である。

（３）　宮西達也流“読み聞かせ”の効用

私の変容は“宮西達也”氏の読み聞かせの効果であったと考えて間違いない。

絵本の読み聞かせの効用は多岐にわたってあるのは当然である。絵本のテーマ、特質に当てはめて語られるべきであるが、ここでは私の状況変化を生み出したという観点で進めたい。

気落ちした児童（私）が元気を取り戻す読み聞かせの例として提案する。

一般に読み聞かせは落ち着いた環境の中で語らなければならないと言われる。これに異を唱える気持ちは微塵もない。私の体験をもとに述べるなら、宮西氏の読み聞かせはこの観点からは異端かもしれないが、参加者の心をつかみ気持ちを変容させるという心に届く読み聞かせの話術のうまさを究明し、活用するべきである。その良さとして次のような観点を挙げることができる。

・声の張り・・・口角を上げて声高らかな語り
・抑揚をつけた語り・・・臨場感を生み出す
・参加者の反応を見ながらの語り・・・聞き手との一体感を醸し出す

・擬態語　擬音語の読みの工夫・・・読み方によって感情の込め方が変わる読み
・何よりも参加者に楽しんでもらおうとする心からの語りなどなど

３　絵本の読み聞かせ・音読で育てる言語感覚

“美しい日本語で優れた日本人を育てる”をキーワードに国語教育の実践・発展を推進されていたのが冒頭で述べた瀬川榮志氏であった。

また氏は、言語感覚を育てるには、音読・朗読・暗唱を取り入れることが最適の方法であるとも述べている（『音読集４すいしゃ　指導のアイディア』光文社）。氏は詳細に述べてはいないが日本語が音読に最適な理由の一つに、我々日本人は「擬音語」「擬態語」を多用することによって日本の繊細な季節の変化や人の感情を表現してきたことが挙げられよう。これが、日本人の文化として根付いてきたという経緯と重ね合わせて考えると、日本語では、音声言語を重視することが容易に想像できる。世界の言語の中でも日本語の「擬音語」「擬態語」の多さは群を抜いている。さらに日本文学は昔話や狂言、落語などに象徴されるように、口承で伝えられてきたということも大きく関与しているであろう。「擬音語」「擬態語」は感情を音声に乗せて表現しやすいという特性をもっている。

だからこそ瀬川氏が述べているように「日本語は音声にのせたとき語や文の構成のよさや、余韻・余情・意味の深さが伝わって」（引用前述と同じ）くるのである。換言するならば、日本人の精神としての琴線に触れ、精神を高揚させるといっても過言ではなかろう。日本語は音声言語として発展してきたという経緯を理解したうえで指導に当たると大きな効果を生み出すという考えは理にかなった考えでもある。我々日本人にはＤＮＡとしてことばを音声で楽しむことが受け継がれているのだ。

２で述べた意気消沈していた小生の気持ちの高揚体験も“日本人の琴線”を震わせたのに違いない。こう考えると“読み聞かせ”“音読”の価値が認識されやすいように思う。「読み聞かせ」を入り口として、通常の授業の中で音読を積極的に取り入れ、発展させたいものである。

音読の効果として瀬川氏は以下の５点を述べている（光文書院発行別冊教師用「音読集４すいしゃ　指導のアイディア」）。

(1) 音読の基礎的技能を身に付ける

発達段階に即して、口の体操・動作化を入れた音読・早口言葉など、楽しく声を出しながら練習することによって、発音・発声・間・リズム・緩急・イントネーション・アクセント・呼吸法・声の強弱・速さなど、音読の基礎的技能を身に付けることができる。

(2) 語感・言語感覚が豊かになる

声に出して読むと、言葉が耳に残り、読み誤りにすぐに気付いて読み返すことができる（正誤感覚）。また、自分が使った言葉はきれいだったか（美醜）、相手に嫌な印象を与えなかったか（適否）などの言語感覚を磨くことができる。

(3) 読む、話す・聞く、書く力を高める

詩を音読すると、リズムや言葉のおもしろさにぐいぐい引き込まれる。読むことが苦手な子どもも、知らず知らずの間に読むことへの抵抗感がなくなる。そして、読むことへの興味・関心が高まり、読む力が伸びてくる。

また、音読は進歩の手ごたえを容易につかむことができる。そのため、読むことに

自信がついた子どもは、自分の考えを進んで話したいという思いが芽生え、話す力も伸びてくる。さらに音読・朗読で覚えた好きな詩や表現を作文に役立てることによって、書く力も相乗効果で伸びてくる。

(4) 伝え合う心と技・人間関係力を育てる

音読は、まず、友達の発表に耳と心を傾けて最後まで聞き取ることを大事にして指導する。そして、相手のよいところを見つけて交流し合う学習を重ねることによって、お互いを認め尊敬し合う温かい人間関係が、学級や学年、さらに学校全体で醸し出されてくる。

(5) 美しい言葉が使える日本人を育てる

音読・朗読・暗唱で目指す子ども像は、明るくはっきりした発声・発音であいさつや返事ができる子ども。さらに、相手や目的、場などに応じた言葉遣いができる子どもである。そして、最終的には、音読・朗読・暗唱を通して、美しい日本語が使える子ども（日本人）を育てる。

瀬川榮志氏の理論には根拠がある、理論がある。確かに日本文学には音読・朗読に適した素敵な作品が数多く存在する。作家が好んで朗読をする姿も見聞している。中原中也は「擬音語」「擬態語」を多用した「サーカス」や「私の上に降る雪は」を好んで朗読したと聞く。また、カエルの詩で著名な草野心平も独特な語りで“カエル語”（「おれも眠ろう」「春の歌」など）を紹介している。文字言語だけでは表現しきれない繊細な心情が日本語には内包されているということを認識して教壇に立ちたいものである。

４　まとめ

宮西達也氏の読み聞かせ会での小生の変容に端を発して瀬川榮志氏の“音読”理論を紹介することによって、読み聞かせを含む音読の価値を記した。心ある国語人は是非とも“読み聞かせ”や“音読”を積極的に授業に取り入れ、子供の心身の健全育成も視野に入れ教育実践を行ってほしいと考えている。

教員の多忙化が叫ばれ、過重負担対策に国を挙げて心血を注いでいるように見えるが、一方では教育は無償の愛で育成される部分も多いことを知って現場での教育に当たりたいものである。その見返りは計り知れない充足感、達成感として我が身に返ってくる。それが教育する者の誇りであり喜びであり醍醐味である。瀬川氏の言葉を借りるなら「愛情の翼で抱け、あの子もこの子も」である。若い教育者にエールを送る。

おわりに

小学校校長退職後、近くの小・中学校で“朝の絵本の読み聞かせ会”を立ち上げて 10 年目となった。地域住民、山口学芸大学生の協力を得て現在に至っている。これまで“正統”な読み聞かせを行ってきたが、宮西氏の読み聞かせを参考にして感情豊かに、日本語の良さ、美しさを遺憾なく表現するような読み聞かせにも挑戦したいと思っている。

日本語は音声言語としての特質をもっているので、教育現場で教育に当たる先生方にも読み聞かせや音読を取り入れた国語教育を実践していただきたいものである。読み聞かせや音読は私のように沈んだ気持ちを高揚させ、生気を湧き起こし前向きにする力がある。悩める子供もいるであろう。読み聞かせや音読の活用が、そのような子供たちの手助けとなって、全ての子供たちが楽しく有意義な学校生活を送ってくれることを切に期待している。